

ゲーテの収集品
—古代彫り宝石、銅版画—

吉池孝一

古代の歴史や、文字や言語に関心を持つ学生と教員の対話。さまざまなテーマのもと勉強会を続けている。登場人物は次のとおり。

佐藤久美^{さとうくみ}：歴史学専攻の学生。東アジアの歴史に関心がある。満洲語の講義に出ている。

山村健一^{やまむらけんいち}：言語学専攻の学生。いろいろな言葉と文字に関心がある。モンゴル語の講義に出ている。

安井教授^{やすい}：漢文の教員。各種の文字資料を収集している。勉強会では学生に教えられることが多い。

・・・・机の上に文庫本がある・・・・

収集

佐藤久美：安井先生は収集が趣味と聞いています。

山村健一：留学した学生の中には、各国のアルファベット表や文字入りのマグカップなどを土産に持って帰る人もいますね。

安井教授：学生さんからの寄贈品を含めて「世界のアルファベット表」や「世界の文字入り陶磁器」の展示会をしました。

佐藤久美：“モノ”を集めるというのは誰でも日常的にしていることですが“収集家”とどこが違うのでしょうか。

安井教授：収集への衝動^{たね}の種は誰の中にもあるのでしょうか。集めようと意識する前に既に集めている人。何かを契機に集め始める人。いろいろですが一時的なもので終わるのが常です。収集家はそれが長続きした人でしょう。長続きすると収集物は網羅的になります。どのような方向に網羅的になるかは収集する人の個性によりませんが、網羅的になるとほかでは見ることができない価値が生まれます。収集の種が芽を出しどのように育つか千差万別の妙味があります。

ゲーテとの対話

山村健一：今回は先生の提案で、エッカーマン著『ゲーテとの対話』¹を読んでゲーテの収

¹ エッカーマン著山下肇訳(1968 ; 1969)『ゲーテとの対話(上)(中)(下)』(岩波文庫)岩波書店。(上)(中)第一刷1968年。(下)第一刷1969年。(上)第12刷1977年、(中)第7刷1975年、(下)第43刷2019年に拠る。

集品を確認しようということでした。それで、なぜこの本なのかと疑問を持ちながら一読しました。ゲーテは『若きウェルテルの悩み』や『ファウスト』などを書いた文学者だとおもっていたのですが、政治・経済・自然科学などさまざまな方面の業績がありおどろきました。この本は学問や芸術をこころざす人たちへのメッセージに溢れています。なぜ“収集”なのか、ということについては疑問のままです。

安井教授：ゲーテの言葉ですが、何かテーマを設定し作業をしながら読むと残るものがあるとのこと。それでこの本についてはいくつかテーマを考えています。そのうちの 하나가収集です。『対話』では収集品をとおして話がはじまる場面が少なくありません。そこで、何を集めどのように扱ったかを見てみようということ。

さてそれでは『対話』のなかの収集に係わる部分を取りあげましょう。まずは私から。

古代彫り宝石の複製

安井教授：次にあげる一文はゲーテが収集したギリシャの古代彫り宝石（Gemme 陰刻を施した宝石）の複製と、現代のメダルに見られる造形を比較し、ギリシャの造形美術が優れていることをのべたくだりです。

こうした文学論のあとで、ゲーテは古代の彫刻された石を見せて、私の関心を造形美術に向けさせた。その石のことはすでに前日にも感嘆しながら話していた。私は、そこにきざまれた題材の素朴さを眺めて、うっとりした気分になった。一人の男が少年に水を飲ませようと重い桶を肩からはずして傾けているのだ。しかし少年はまだうまい具合にいかないで、口まで十分にとどかない。水はなかなか出てこない。少年は、両手を桶にかけて男を見上げ、もう少し傾けてほしいと頼んでいる様子である。

「ところで、どう思う？」とゲーテはいった。「たしかにわれわれ近代人は」と彼はつづけた、「このように、ほんとうに自然でほんとうに素朴なモチーフのもつ偉大な美しさを感じるし、また、どうすればそうしたものが作れるかという知識も概念ももちあわせている。だがわれわれは、それを作ることができない。悟性が勝ちすぎているのだ。だからこういううっとりするような優美さをすっかりなくしてしまっているというわけだ。」

つぎに、私たちは、ベルリンのブラントの彫ったメダルを見たが、それは、父の武器を石の下から引っ張り出そうとしている若きテセウスをあらわしたものであった。この像の姿態は、とてもりっぱなのだが、石の重みに抗してふんばった手足の緊張の表現の点が物足りなかった。若者が、一方の手では、まだ石をもち上げようとしているのに、もう一方の手ではやくも武器を持っているのは、けっして良い考えとは思えなかった。つまり彼はまず重い石を脇へどけてから、武器を取り出す方が、自然だからである。「代りに今度は」とゲーテ

はいった、「昔の人が同じ題材でやってみた古代の彫り^グ宝石^ムを、君に見せよう。」

彼は、シュターデルマンに、一つの箱を持ってこさせた。中には、数百点もの古代彫り^グ宝石^ムの複製が入っていた。これは彼が、イタリア旅行の際、ローマから持って帰ったものだ。私は、その中に、前と同じ題材が、古代ギリシャ人の手で扱われているのを見たが、たしかに、まるっきり別なものようだ！ 若者は、全身の力をふりしぼって、石を突張りあげている。そして彼は、その重さにも十分拮抗できている。というのも、すでに重さも克服され、石は、もうすぐ脇へ投げ出されるころまで持ち上げられていることが明らかだからだ。この若き英雄は、全身の力をこの重い石塊にかけながら、視線だけを、自分の足元にある武器におとしているのだ。

私たちは、こういう扱い方にあらわれた偉大な自然の理にふれて、喜んだ。

(1824年2月24日。上巻110-111頁)

山村健一：古代彫り宝石とメダルに施された造形によって、人の自然な動きと不自然な動きを比較していますね。ブラントの彫った現代のメダルの造形は人の活動（心理を含めて）として不自然だということです。

安井教授：これは「自然の理」を反映した造形が大事だという話ですが、人間に関わるものという面からみれば、芸術だけでなく歴史学や言語学にもあてはまることでしょう。

山村健一：どういふことですか。

安井教授：歴史学や言語学も人の活動の反映だから、人の自然な動きや心理から離れることはないということです。しかし意外なほど人はこのことに関心を払いません。思い込みや、きれいに見える結論を前提として、自然な動きであるか、自然な心理であるかということをお脇において議論をすすめる場合が少なくありません。とくに山村君が身を置く言葉の学問では、人の活動（心理を含め）から離れて議論をする傾向が生じやすいので注意が必要です。

佐藤久美：ところで、実物は余計な操作がないのでいろいろな気付きを誘発します。しかし言葉による解説や複製品におきかえたばあい、切り捨てる部分が生じます。その点ゲーテが集めた古代の彫りの宝石は複製です。複製でいいのでしょうか。

安井教授：実物がベストですが“一点もの”の入手は困難です。よくできたものなら複製でもいいのでしょうか。

銅版画

山村健一：つぎは鑑賞眼を養うため収集した銅版画のなかから最高の作品をエッカーマンに見せる部分です。

ゲーテと一緒に食事。——食事がすんで、あとかたづけもおわった後、彼は、シュターデ

ルマンに命じて、銅版画のはいったいくつもの大きな紙挟みをはこばせた。従僕はそれをひきずるようにして持ってきた。紙挟みの上には、ほこりが少々たまっていて、それを拭う手頃な布が手もとになかったので、ゲーテは不機嫌になり、従僕を叱った。「もういちどだけお前に注意しておこう。」と彼はいった、「何度も用意しておけと言っている布を、今日も買いに行かなかったのなら、明日私が自分で行って来る。私が、約束は必ず守るということを、教えてやろう。」シューターデルマンは引きさがった。

……………省略……………

それから、私たちは紙挟みをあけて、銅版画やスケッチの鑑賞をはじめた。ゲーテは、こういうとき、私にとっても気をつけてくれて、私の美術鑑賞に対する見識を一層高い段階へ引き上げようとしているのが、私にはよくわかる。彼はその種類の中で完全無欠なものだけを見せてくれて、私が、最高の芸術家の思想をよく考え、ただちに最高の芸術家を感じる境地に到達できるよう、芸術家の意図と業績を私に明らかにしてくれる。「こうして」とそのとき彼はいった。「いわゆる趣味がつくられるのだ。趣味というものは、中級品ではなく、最も優秀なものに接することによってのみつくられるからなのだ。だから、最高の作品しか君には見せない。君が自分の趣味をちゃんと確立すれば、ほかのものを判定する尺度を持ったことになり、ほかのものを過大でなく、正当に評価するようになるだろう。私が、それぞれの種類のうちの最高作を見せるのは、どんな種類のものも軽視せずに、偉大な才能がその種類の頂点を示してさえいれば、どんな種類だって楽しいのだ、ということをおぼえてもらいたいためだ。たとえば、フランスの画家のこの絵は、ほかのどれよりも粋だ、だからこの種のものの傑作だ、といえる。」

ゲーテは、その絵をわたしてくれた。私はそれを喜んで眺めた。開け放たれた窓と戸の間を通して庭が眺められるある夏の離宮の一室に、世にも優雅な人たちが集っている。三十歳ぐらいの美しい婦人が、楽譜を手にしてすわっているが、今しもちょうど歌い終わったところらしい。そばにいる十五歳ぐらいの少女は、椅子にやや深くもたれている。うしろのあけ放した窓のところに、もう一人の若い女性が立っていて、彼女はラウテを手にして、まだかきならしているようだ。この瞬間に、一人の若者が入ってきたので、婦人たちの視線がそちらに注がれる。彼が、この音楽のまどいを中断させたらしく、軽く会釈しながら、婦人たちの前に立っているところを見ると、お詫びの言葉をのべている様子で、それを婦人たちも快く聞いているような印象をうける。

「これは、」とゲーテはいった、「カルデロンのある種の作品と同じほど、粋だと思うね。君は、この様式の作品の中での最も優秀なものを見たわけだ。ところで、これはどうかな。」

こういいながら、彼は、有名な動物画家のローズのエッチングを二、三枚見せてくれた。みんな羊ばかりで、これがいろんな姿勢やさまざまな状態で描かれている。顔つきの単純さ、毛の醜いところや、もじやもじやしたところなど、どれもまったく真に迫っており、自

然のままのようである。

「この動物たちを見ていると」とゲーテはいった、「いつも不安になる。このかたくなな、愚鈍な、夢でもみているような、あくびでもしているような、羊のありさまをみると、自分までその動物に対する共感にひきこまれてしまい、自分も同じ動物になってしまうのではないかと、恐ろしくなり、この芸術家その人も、一匹の羊であったかもしれないとさえ信じたくなるのだ。いずれにしても、彼が、外皮につつまれた内部の性格をこのように迫真的に表わそうとして、この生物の魂の中まで入りこんで考察したり、感じたりすることができたのは、まったく驚嘆に値いすることだ。しかし、これで、偉大な才能というものが、自分の性質にふさわしい対象についているとき、どんなものをつくりだせるかということがよくわかる。」

「一体、この画家は、」と私はいった、「犬猫や猛獣なども同じように迫真的な姿に描かなかったのですか？ それどころか、さまざまな状態のものに共感するという偉大な天分を備えているからには、人間の性格だって、同じような忠実さで扱えはしなかったのでしょうか？」

「いや、」とゲーテはいった、「そういうものはすべて、彼の柄ではないのだ。ところが、おとなしい草食動物、たとえば羊とか山羊とか牝牛などの動物となると、いつまでも繰り返し倦きもせず描いた。これこそ彼の本領であって、そこから一生ぬけ出るようなことはなかったのだ。彼がそうしたのは賢明だったよ！ この動物たちの状態との共感、彼にとって先天的なもので、動物たちの心理についての知識はあとから得たものだから、そこで彼はこの動物たちの体徴についても、じつに恵まれた目をそなえていたのだ。しかし、ほかの生物にはおそらく、それほど目が利かなかつたらしいんで、それで、それを描くという使命感も衝動ももちあわさなかったのさ。」 (1824年2月26日。上巻118-121頁)

佐藤久美：話はそれですが、従僕のシュターデルマン、少しかわいそうです。

安井教授：この対話は1824年（ゲーテ74-75歳）2月のもので、注70-6によるとシュターデルマンは1814年から24年まで従僕をつとめたとあります。この対話は1824年2月だからシュターデルマンはほどなく離職することになります。

山村健一：「従僕はそれをひきずるようにして持ってきた。」とあるので、よほど重く、あるいは銅板そのものが入っているのではないかと誤解しそうですが、紙挟みの中身は紙の銅版画です²。

佐藤久美：「いくつかの大きな紙挟みをはこばせた。」とあるので、かなりの点数があったのでしょうね³。そのなかから最高のものをエッカーマンに見せた。

² 「ゲーテはデッサンと銅版画のはいった紙挟みを手元へ持ってこさせた。彼はその中の二、三枚を静かに見つめたり、ぱらぱらと繰ったりしてから、私にオスターデの絵の美しい銅版画を渡してくれた。」1829年2月4日中巻54頁。

³ 銅版画の収集について次の記述がある。ゲーテを待つ来客H氏とエッカーマンの話。「H氏は、その間にあたりを見まわしていたが、壁にかかった絵や大きな山岳地図には目もく

山村健一：見識を高めるにはその分野の最高の実物に接することだとのこと。個人の収集物によってそれができたわけですから驚きです。

佐藤久美：ところで、羊の銅版画にかかわる話が気になりました。「自分の性質にふさわしい対象」に向かったときに才能が発揮されるとあります。これはどういうことでしょうか。

山村健一：自分の中にもともと備わっているものしか見えないし共感もできない、というのは芸術以外にも言えるのでしょうかね。ぼくは言語学をやろうとしているのですが、ぼくにとって、もっとも良く見えるものは何か、それが問題です。

安井教授：“どの分野”で“どのような方法”によったならば力を発揮することができるかというのは、他人のほうがよく見えているかもしれません。もっともゲーテのような場合もあります。ゲーテは若いころ絵画を志していたのですが、あるとき自分の才能に見切りをつけました。そのあたりの事情について少々長くなりますが引用します。

話は、誤った傾向一般のことに転じ、ゲーテは語りつづけた、

「そういうわけで、私自身の造形美術を実際にやってみようという傾向も、もともと間違ったものだった。というのも、私には、それに対するもって生れた素質がなかったために、そういうものを自分の中から発展させることができなかつたからだ。まわりの風景に対するある種の多感性は、私にもそなわっていたから、最初のスタートぶりは、じっさい前途有望であった。イタリアの旅が、この、絵を実作するたのしみを破壊してしまった。広い視野が生れたかわりに、肝心の能力の方が消えてなくなった。そして、芸術の才能というやつは、技術によっても、美学によっても、発展するものじゃないから、私の努力は無駄になつたわけだ。
(1825年4月20日。上巻193-194頁)

「………………。だが、それにしても人間というものは、不可解な存在であつて、自分どこから来てどこへ行くのかもわからず、世の中のことろくろくわかつていないし、ましてや自分自身のことになると何よりもわからないのだ。私もやはり自分を知らないし、また知ることなど真平御免だね。ところで、私の本音は、じつはこういうことなのだ。四十のときイタリアで、自分には造形美術の才能が欠けている、だからこういう自分の傾向は誤っている、という程度までは、己れを知るぐらいの賢明さを十分もちあわせていた、ということだよ。何かを描いてみても、具象的なものに対する充実した衝動をいささかも感じなかつた。私は対象が内心を貫いてしまわないかということに一種の恐れを抱いていた。どちらかと

れずに、多くの紙挟みを入れた書棚に注目していた。それについて、私は、彼にこう話した。そこには、有名な大家のデッサンや各流派の秀作の銅版画がおさめられていて、それらは、ゲーテが、今までにぼつぼつと集めたもので、彼は、それらをくりかえし飽かずに眺めてたのしんでいる、と。」1825年1月10日上巻165頁。

いうと、もっと弱々しいもの、中庸を得たものが私の性格にはぴったりしていた。風景画に取り組むときには、ぼんやりした遠景から描きはじめて、中景にくると、いつも前景にしかるべき力を揮うことをためらってしまうために、私の絵は、結局少しも本来の効果をあげることができなかった。また、練習らしい練習などしないから、少しも進歩せず、しばらく遠ざかっていると、いつもはじめからやり直しをしなければならなかった。とはいうものの、まるっきり才能がなかったわけではないよ。とくに風景画については、そうだ。それでハックケルトはよくいったものだよ『もし、一年半ばかり私の許に居られるなら、自他ともに満足できるようなものが描けるようになります。』とね。」私は、この言葉をひじょうに興味深く拝聴した。「しかし、」と私はいった、「造形美術の才能が、ほんとうにあるかどうか、どこで見分けられるのでしょうか？」

「本物の才能をそなえている人は、」とゲーテはいった、「形態とか釣合とか色彩とかに對しては生れながらにいい感覚を持っているから、ほんのちょっと指導を受けただけで、そういうことはすべてたちまち正確に行なえるのだ。とりわけ、形あるものに対する感覚や、光によってそれを手にとるようにはっきりと描き出す衝動を持っているものだ。また、練習の手をやすめているあいだにも、内部で進歩をとげ成長しているものだ。そういう才能を見分けることは、むずかしくはない。ただし、それをもっともよく見分けられるのは大家だ。

(1829年4月10日。中巻122-123頁)

「困るのは」とゲーテはつづけた、「人生において誤った傾向にさんざん邪魔されているのに、それからきっぱりと離れられないうちは、そういう誤った傾向に気づかなかったことだ。」

「しかし、」と私はいった、「ある傾向が誤ったものであるということを、どこで見分ければいいのでしょうか？」

「誤った傾向は、」とゲーテは答えた、「生産的ではない。そういうばあいには、生み出されたものにも何の価値もない。他人をみてこれに気づくのは、それほどむずかしいことではないが、自分自身にそれを認めることとなると稀有な話で、どうしても、偉大な精神の自由さが求められる。たとえ自分で知ったところで、それが力になるとはかぎらない。遲疑逡巡して、なかなか決心がつかないからだ。ちょうど、不実の証拠を長いあいだくりかえし見せつけられているというのに、恋する娘から離れるのがむずかしいようなものさ。こんなことを言うのも、自分の造形美術に対する傾向が誤ったものであるとわかるまで、どんなに多くの年月を費したか、そのことを知ってから身を引くまで、さらにどんなに長い年月を要したかを考えるからこそだ。」

「けれども、」と私はいった、「この傾向は、あなたに多くの利益をもたらしています。だから、それが誤っているなどと簡単にいえるわけがありません。」

「洞察力を手に入れることができた。」とゲーテはいった、「それで、私も安心していられるのだ。これこそ、どんな誤った傾向からでも引き出せる利益なのだよ。ろくろく才能も

ないのに、音楽に打ちこんでも、その人はむしろ巨匠にはなれる筈がないが、巨匠の作ったものを知り、評価するようにはなるだろうね。私もさんざん努力してみたものの、画家にはなれなかった。けれども、あらゆる美術の部門を探求してみたおかげで、一本一本の線を説明できるようになり、ほめるべき点と不満な点を区別できるようになった。これは、けっして小さな収穫とはいえない。……………」

(1829年4月12日。中巻128-129頁)

佐藤久美：ゲーテのように“自分の中にあるもの”を見さだめ、それが正解であったと思えるのは幸運なことですね。

山村健一：カルデロンにとっての“羊”は、“自分の中にあるもの”と共鳴するものでした。そこで、僕にとっての“羊”は何か、良く見えるものは何か、生産的なものは何か……………、悩ましいところです。

安井教授：これから長い試行錯誤が始まるのでしょうか。私はいまだに錯誤のさなかにいますが。